

槐

かい

岡井省二創刊

平成27年12月号



平成二十七年十二月一日発行 第二十五卷第十二号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第二九四号(毎月一回一日発行)

櫟 の 実

高橋将夫

大花野慶事弔事と行き暮れて
水音は流れ去らずや秋の川
朝露が夜露となつて戻りたる
古希にして時折りまぶしカナナの緋

人に有り案山子には無き眠りかな
人である証なりける愁思かな
人をらぬ平和な宇宙原爆忌
稲つるび女狐コンと鳴きにけり
鱗雲の引き合つてゐる力かな
安らぎは秋の簾の奥にあり
どちらへもころがる運や櫟の実

〔俳句〕十一月号より十一句



槐安集

水野恒彦

照り翳り南蛮ぎせる見えて来し
一瞬を容とすれば白木槿
大花野超えて日輪衰へし
いちにちを未完のままに鱗雲
白桃やそのまま夜を深うせり

加藤みき

秋風を両手を広げ満面に
車座や蓮葉に盛りし蓮の飯
秋の酒下戸のわれにもかんばしき
月と星寝入るまで鳥大騒ぎ
いつのまにか怒りをさまり棗の実



中島陽華

綿摘むや天地の詩口ずさみ
熊野かな鬼の瓢の流れをる
デザートは山もり龍眼秋夕焼
安達太良はおつぱい山よちちる鳴く
また一步道をそれてや今朝の秋

竹内悦子

刀豆の花は桃色大日記
数珠玉や昨日の吾と今日の我
踏み込んでならぬ道なり曼珠沙華
無花果の弾ける今を悦びぬ
駅前に黄色い木槿牛の骨

雨村敏子

子規の忌の花野の雨となりける
重陽やをのこばかりを生みにける
青海やかりがねの列垂しに似て
初産の母よ白桃召し上がれ
いなつるび縄文の村しづまれる

本多俊子

虫の音や眼をとじて見ゆるもの
人間のひかがみ 臍 白く秋高し
大日の臍のあたりの鱗雲
大いなる雲に秋思を見すかさる
たましひの遠出してゆく花野かな

近藤喜子

朝鈴や浅き眠りを縁取りぬ
こつと咲く時空の裂けめ曼珠沙華
フェルメールの蒼すみとほる秋気かな
身の火照り桃に伝はつてはならぬ
雲中の月くすくすと薄あかり

瀬川公馨

万物の榛いろに夏くるるる
大き腹抱へて蜘蛛の闇を出づ
蝸のこゑの間遠となりにけり
鳴神の聞いたか坊主呼ばはりぬ
初秋なり鳥の巢に だいだらぼっち 大太法師
鳥の巢 北京の競技場

久保東海司

盛り塩の影の正しく厄日無事
警策の如く鮎の背打つしぐれ
コスモスに風の存問ありにけり
白粥の白のまばゆき夢二の忌
柿二つ食ひし子規程名は成さず

柳川 晋

初潮や星の鼓動は急がない
今泣いた鳥が笑ふ爽やかに
月光や迦楼羅は竜を飲み下す
維新^{これあらた}ほどの意味なり芋嵐
天高く祈りは声となりにけり

熊川暁子

頬撫でる風に肌理あり今朝の秋
林檎食んで齒の跡白き信濃かな
流れ星落ちて野の花増えにけり
耳もとに秋の蚊の来てささやけり
よそ者として稔田を素通りす

寺田すず子

星飛ぶやけものの匂ひ濃くなりぬ
ともしびの火影流るる秋徼雨
虫の声あはれと聞けば哀れなり
抜きん出て月に揺らぎし叢薄
桐一葉夕べの鐘と共に散る

岩下芳子

渋柿のみしりみしりと太りけり
小鳥来る枝から枝へ地から地へ
一切の事秋天に委ねたる
ここからは金色世界省二の忌
ありつたけの赤を尽して曼珠沙華

近藤紀子

風すぢに冬瓜ひとつ置かれある
さはやかに分水嶺を過ぎにけり
國訛りで橡の實ことし豊作と
青棗光返してをりにけり
喪の家の百日紅の揺れてをり

岩月優美子

秋の蛇ジュラ紀の森へ入りにけり
澄む水に樺の木いよよ白かりし
鰯雲こころの波の静かなり
芒野や考ちちの歌声聞こえ来る
晴れ渡る宙晩秋の水たまり

竹中一花

萩月や千木を越えゆく笛の音
月見酒こんがら童子の唄聞こゆ
土匂ふ軍手の中に新松子
田の色のゆれぬて匂ふ駅舎かな
桃 瓦 鍾 馗 瓦 や 鰯 雲

槐市集

高野昌代

旅の夜の入院五日目火の恋し
盆唄を流して豊作祈る町
点滴や花萩こぼるこちすら
満月を足搔ひてとらん吾がポチは
天心の弦月にぶしや雨催ひ

田中信行

夜長にはジャズを選びて灯消す
ロバ追ひの少年二人秋に入る
エチオピア アンスアバにて
夕月夜小舟行き交ふボスポラス
秋天にアザーンの声響くなり
アザンリイラムの祈りの前の口上
錦秋の茶屋に雨だれ落つるなり

谷岡尚美

お隣りのやさしきことば秋櫻
孟夏過ぎかたづけてゐる葭簀かな
焼栗を好みし母の剥き上手
早寝してすぐに鼾となる夜長
月明や決壊の川滔滔と

時澤藍

このあたりいつも木屋匂ひくる
簡単に加齢で済ます敬老日
初物の首位守りたる今年米
カマキリの顎はどうして三角形
今はもう松茸狩りとは何のこと



中 貞 子

天空の里へ続けり草紅葉
喜寿祝ふごとくあまたの赤とんぼ
伊勢湾を遠景にして赤蜻蛉
刀豆や大和魂持つ漢
千体の観音立像秋うらら

中島昌子

稚の手の固き拳や新松子
秋遍路黒髪束ねをりにける
関の声上げたる畦の曼珠沙華
風そよぐ稲架のふくらむ日和かな
いなつるびひとゆすりせし田の面かな

中田禎子

落鮎や山また山の美術館
若沖の白象秋のてふてふかな
秋果盛る絵心の無き大きな手
千体の石仏の道秋のこゑ
指舐めて風の向きみる大花野

中谷富子

城跡の高きに登る腓かな
積まれたる早稲の袋や雲走る
ここからは鯖街道や片しぐれ
ラジオから落語聞こゆる松手入
モネの池通りすぎたる初しぐれ

中道愛子

床柱の短冊かへて今朝の秋
どんぐりのお椀並べてけものみち
佇みて吾子を見送る雁のころ
日本海を望む砂丘の灼けてをり
夏痩せをあなどるなかれ一大事

橋本順子

ホームより列車の長し虫時雨
爽やかに一礼をして本題に
息つぎの間近に聞こゆ踊歌
塔までの道真直なり新松子
ゆきゆきてたどり着きたる花野かな

槐集

高橋将夫選

秋出水わたしは何もできません
大阪 江島 照美

幸せは桃の桃色はづむ胸

振り払ふおなもみ確としがみつく

罔象女みずはのめを恋ひて蚯蚓の鳴いてをり

信頼を色無き風に飛ばさるる

ピノキオの木の鼻取れる今日の月

話したくなるまで訊かぬ夜長かな

ほろ酔ふや桂男と盃かはし

本閉ぢてこの世の秋に帰りたり

我が影の我をはなるる良夜かな

導きの白き陸橋涼新た

無花果の種ぶつぶつと罪深し

歳月を巻き戻したり鳳仙花

鰯雲大風呂敷の破れたり

舌抜かるるは人間のみよ鴟の声

摂津 中田 禎子

有松 洋子

銀杏の奈落到落つることもまた
寝屋川 前田美恵子

ふと我に返るときあり放屁虫

秋暑しくるんと豚の尻尾かな

弓道の的の横なる酔芙蓉

大胆な筆使ひなり秋に入る

秋うらら孫はひまごに絵本読み

街あれば銀座と名づけ村祭り

旨そうに熟れるが高し通草揺れ

引力に勝てず落ちくる木実かな

夕顔の折目正しく咲く白さ

目黒より届く秋刀魚の海の色

飛んできし蟬の仰向け直しやる

キャンパスにカレーの匂ひ二期来る

露の身にペースメーカー抱きをり

新米を装ふ至福と致しけり

枚方 谷岡 尚美

山根 征子

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

秋出水わたしは何もできません

江島 照美

人間は大自然の前で全く無力である。洪水や噴火を見てその脅威を詠もうとしても、それはまさに筆舌に尽くしがたい。掲句は苦心の末の偽らざる究極の表現といえよう。

〈信頼を色無き風に飛ばさるる〉の句、信頼を裏切ったのは意外にも爽やかな秋風。〈振り払ふおなもみ確としがみつく〉の句、おなもみは振り払おうとすればするほどしがみつく。どちらの句も、こと、ものの核心をついている。

〈幸せは桃の桃色はつむ胸〉の句の自由奔放さは作者ならではのもの。〈罔象女（みずはのめ）を恋ひて蚯蚓の鳴いてをり〉の句、罔象女は水の神だが、「蚯蚓鳴く」の季語が神代の世界にいざなう。

話したくなるまで訊かぬ夜長かな

有松 洋子

話したくなければ、話したくなるまで待つという。なにしろ、秋の夜は長いから。すぐにでも聞きたいのが本音だろうが。〈本閉ちてこの世の秋に帰りたり〉の句は読書の秋にふさわしい一句。一心に読書をしていて、ふと本の世界から現実の世界に戻ったという景。いかに本の世界に没入していたかは、思わず出た「この世」という表現が如実に物語っている。

〈ピノキオの木の鼻取れる今日の月〉は童話と古典の世界が融合するような一句。ピノキオの木の鼻が取れて人間になりそうな神秘的な月光なのだ。

舌抜かるるは人間のみよ鴟の声

中田 禎子

闇魔さんが舌を抜くのは人間だけか。そう言えば、嘘をつくのは人間だけ。鴟の高音がよほど腹に据えかねたのだろう。〈鱗雲大風呂敷の破れたり〉の句は鱗雲が大風呂敷からばら撒かれたようで痛快。〈無花果の種ぶつぶつと罪深し〉の句、なるほど無花果にはそんなイメージがなくてもない。

銀杏の奈落に落つることもまた

前田美恵子

〈銀杏散るまつただ中に法科あり〉（山口青邨）という有名な句がある。この句は落葉で掲句は銀杏（ぎんなん）。それにしても散る場所が法科で、落ちる場所が奈落とはなんともしニカル。〈ふと我に返るときあり放屁虫〉の「ふと我に返るときあり」は誰にでも覚えのある景。放屁虫の回転が意表を突く。〈秋暑しくると豚の尻尾かな〉はユーモラスで罪のない一句。俳諧の一語。〈弓道の的の横なる酔芙蓉〉の句、弓の的と酔芙蓉の取り合わせが意味深長。

秋うらら孫はひまごに絵本読み

山根 征子

子に絵本を読むだけの景。しかし、孫がひ孫に読んでいるのだ。おしやまな顔で読んでいる様子がなんとほほえましい。〈街あれば銀座と名つけ村祭り〉の句、どんな田舎でもそれなりに銀座と呼ばれる所があった。故郷が思い出される。

飛んで来し蟬の仰向け直しやる

谷岡 尚美

もう先は長くない落ち蟬だが、それを起こしてやるやさしさに共鳴。〈露の身にベースメーカー抱きをり〉の句、ベースメーカーに対する「露の身」が心に響く。〈以下略〉